

横山ゆずり作 「先生 4」

<前編>

- 教師A ……というわけで、ここでは1段落で、文章全体の話題を出していることになる。それは、さっき言った「自然と人間」ということだな。そして次の2段階で、話を更に…。こら、桜井！ 何やってる。顔を上げなさい！
(桜井純一、隠れて弁当を食べている。)
- 教師A バカ者！ どういうことだ。今は授業中だぞ！ 弁当食ってるとは何事だ！
- 桜井純一 返してくれよ。今日も朝飯抜きだったから、もう腹減っちゃって。昼休みまで我慢してたら、飢え死にしちゃうよう。
- 教師A ふざけるな！ 腹が減ってるのは、先生だってほかの生徒だって同じだ。今何の時間だと思ってるんだ。勉強の時間だろ、勉強の。
- 純一 だから邪魔にならないように静かに食ってたじゃないか。
- 教師A 静かなら何をしてもいいのか。全く話にならん。大体…。
- (効果音) (終業のチャイム)
- とにかく授業中に弁当を食うことは許さん。担任の先生にも報告しておくからな。
- (効果音) (休み時間のガヤ)(職員室)
- 教師A 馬場先生。先生のクラスの桜井純一。ありゃ手に負えませんな。
- 馬場先生 桜井がまた何かしでかしましたか。
- 教師A 何かも何も…。わたしの時間中に堂々と弁当食ってくれましたよ。
- 馬場先生 はあ、弁当食っちゃいましたか。(笑いながら)そりゃあいつらしい。
- 教師A 笑い事じゃありませんよ。それで注意したら、あいつ、悪びれた様子もなく口答えするんですからね。全くあきれて物も言えんとはこのことだ。わたしはこの中学に来て8年目だが、あんな生徒は初めてだ。
- 馬場先生 は、申し訳ありません。わたしも担任として不行き届きでした。嚴重に注意ときますので。桜井も、ちょっと悪ぶってるところがありますが、根はいいやつだと思っんですよ。
- 教師A まあ、今の若い先生たちは、そうやって生徒たちに理解を示して、何て言うかこの、「友達間隔」というんですかね。まあ、気持ちは分からんでもないが、逆にそれで生徒になめられてるということもあるかもしれませんよ。
- 馬場先生 はあ、なめられてますか。
- 教師B そうそう。生徒と同じ土俵に立とうと思っても、しょせんは教師と生徒、どうしても越えられない溝があるんですから、無理しないほうがいいですよ。
- 馬場先生 はあ。

教師A ま、とにかく、桜井のことは馬場先生に確かに報告しましたからね。早く手を打つとかなないと、他の生徒にまで悪い影響が及ばないとも限らん。

教師B そうそう。それで、いざ何かあったら、途端に「担任は何してた？ 学校の責任は？」って、矛先がこっちに向くんだから。

馬場先生 「何か」というと？

教師B だから、いじめとか、登校拒否とか、不純異性交遊とか…。

馬場先生 いや、いくら何でも、彼らがそんなこと…。

教師B 甘い甘い。そんなふう簡単に生徒を信じちゃうと、あとでしっぺ返しに遭いますよ。あいつら、何とか教師や親の目を盗んで勝手なことをしようと、隙をねらってるんだから。

馬場先生 (独り言のように) 僕は、そんなふうには考えたくないなあ。

ナレーション ここは青春中学。馬場先生は、教育への熱意に燃える若い数学教師。そしてくだんの桜井純一は、馬場先生の担任する2年A組のいわゆる“問題児”であった。

馬場先生 …えー、このXに6を代入すると、 $2X$ は12、そしてこれに7を足して3で割ると、こうなるわけだ。桜井。

純一 え、はい。

馬場先生 桜井、お前、今日は弁当は食わないのか？

クラス生徒 (笑い)

純一 ちっ、もうバレてんの。今日も食っていいんですかあ？

馬場先生 ああ、構わんよ。どんどん食え。腹が減っては戦ができません。

純一 ほんと？

馬場先生 ああ。ただし、おれも腹ペコだ。それに、食べ物誘惑には弱い。お前がうまそうに食ってるのを見て、思わず横からおかずの1つもつまんでも、悪く思うなよ。

クラス生徒 (笑い)

馬場先生 ついでに、みんなも腹が減ってる。だから、みんなにも一口ずつ分けてやれ。それでもいいんなら食ってもいいぞ。

クラス生徒 (手をたたいて歓声) こっちにも回してくれよ(男子)、メニューは何?(女)など。

純一 やなこった。冗談じゃねえよ。ちえ、どうりでおかしいと思ったよ。

馬場先生 (笑いながら) そうか。いいのか？ 遠慮するなよ。…どうも桜井は、今日は弁当は食わないようだから、みんなも分け前はあきらめろ。

クラス生徒 何だ、つまんねえ。(男) 純一、食えよお(男)など。

馬場先生 さあ、それじゃ方程式に戻るぞ。人間、食べ物や着る物より大切なこともあるんだからな。じゃ、問いの2、山崎、読んでくれ…。

ナレーション 大体、いつもこんな調子で、馬場先生にかかると、さすがの純一も拍子抜けし

てしまうのだった。純一は、そんな馬場先生が妙に気に入って、時々先生のアパートを訪ねていた。

(効果音)

(ドアをノックする音)

純一

先生、おれ。

馬場先生

おう、北か。入れよ。例によって散らかってるけどな。

純一

ほんとだ。たまに掃除くらいしなよ、先生。おれの部屋のほうがまだましだぜ。掃除とか洗濯とかしてくれる彼女、いないの？

馬場先生

お前、傷つくこと言うなよ。彼女いなくて悪かったなあ。これでもおれは、学生時代にはもてたんだぞ、結構。

純一

ほんとかなあ。信じらんねえや。ね、先生。何か食うものない？

馬場先生

何だ。お前はいつも腹すかしてるやつだなあ。

純一

だって、おふくろ、今日は残業で遅くなるらしいからさ。

馬場先生

そうか。お前のお母さんも大変だなあ。おれのおふくろも、女手一つでおれと弟を大学まで出してくれたけど、やっぱり朝から晩まで働き詰めだったもんなあ。

純一

それにしてもさ、先生の部屋はいつ来ても本ばっかしだよな。数学の先生でも本読むんだなあ。

馬場先生

「数学の先生でも」とは何だ、「でも」とは。おれは、昔から本は好きだったな。手当たり次第に読んだ時期もあったけど、今は選んでじっくり一冊を味わう、という感じだなあ。

純一

それにしても、いろいろあるじゃん。志賀直哉、山本周五郎、「山歩きの楽しみ」、「ヘラブナ釣り」、「教育概論」、「奇跡の数学教授法」、それに…何だ？「聖書」!? こんなのみであるわけ？

馬場先生

「こんなの」とは失礼だな。聖書はな、「本の中の本」といってな、世界中で一番多く読まれている本なんだぞ。

純一

それはそうかもしれないけど、何か先生のイメージと違うもんな。先生が聖書持って「クリスチャンです」って言っても、ピンとこないんだよな。

馬場先生

そうか？ じゃ、クリスチャンでどんなイメージだ？

純一

うーん、何かこう、まじめそうで、眼鏡なんかかけてて、冗談なんかあまり言わなくてさ、きちんとしてるって感じ。もちろん部屋の掃除とかもちゃんとしててさ。

馬場先生

おいおい、いじめるなよ。まあ、おれも教会に行く前は、クリスチャンに対して、お前と似たようなイメージ持ってたからなあ。だから、まさか自分なるなんて思っても見なかったさ。

純一

じゃ先生は、何で教会なんか行ったんだよ。

馬場先生

うん。あれはちょうど大学4年生の時だったなあ。そのころ、おれには将来を約束してた女性がいたんだよ。同じ大学で、一緒に教師になることを目指してた。

おれは教員採用試験にも合格して、夢に一步一步近づきつつあった。彼女の気持ちを疑ったこともなかった。ところが、卒業試験も近いある日、彼女から呼び出されたんだ。

純一

分かった。別れ話だ。

馬場先生

まあ聞け。約束の場所に行ってみると、彼女と、そして同じゼミの仲間の男が待っていたんだ。…あとはもう分かるだろ？ おれも男だ。そのときはグチグチ言わず、潔くあきらめたさ。だけど、その時のショックは本当に口では言えないぜ。しばらくは飯も食えず、酒ばかり飲んでた。もちろん未練もあったよ。何より、今まで信じていた人に裏切られた、見放されたというのが、一番こたえたなあ。この世でたった一人、最後まで味方になってくれると思ってた人が、離れていったんだからなあ。もうだれも信用できないと思った。オーバーかもしれないけど、世の中の人間みんなが、おれをバカにし、無視してるような気持ちになっちゃったんだよなあ。

純一

それで、どうしたの？

馬場先生

それでな、おれは思い詰めて、ある日、あることを決心したんだ。

純一

あることって、先生、まさか…。

<後編>

純一

ある決意って、先生、まさか…。

馬場先生

バカ、おれを殺すなよ。いや、実際、生きていてもしょうがないと思ったこともあったけどな。おれがその時決意したのは、自殺じゃなくて、それまでの生活と、思い描いていた将来の夢とを、すべて捨てようということだったんだ。

純一

将来の夢って、先生になることだろ？

馬場先生

ああ、その夢は、彼女と2人で目指してきたことだったから、彼女がいなくなったとき、もうどうでもよくなってしまったんだ。それで、卒業間近の大学もやめて、せつかく受かった教員採用試験も棒に振って、地方の山奥にでもこもろうか、それとも放浪の旅に出ようかってな。あの時は真剣にそう思って、大学に退学届けを出そうと考えていた。ちょうどそのころ、一人の人が下宿に訪ねてきてくれたんだ。普段、そんなに仲のいいやつじゃなかったんだけど、おれがずっと休んでて姿を見せなかったんで、生きていかどうか心配で見に来た、と言ってた。彼とは教育実習に一緒に行ったこともあって、なぜかふと、そんな時の自分の気持ちを打ち明けてしまったんだな。

純一

バカにされただろ、先生？

馬場先生

いや、それが、そいつ、おれの話聞いて、涙を流したんだよ。あれには、おれのほうがびっくりしたな。で、最後、帰り際に、「祈ってるから」と言ったんだ。そいつ、クリスチャンだったんだ。それで次の日、今度は聖書を持って訪ねてきた。あち

こち開いては話してくれたんだけど、特におれが強烈に覚えている言葉があるんだ。こう書いてあった。「あなたはわたしの目には高価で貴い。わたしはあなたを愛している。」神が人間に向かって言われた言葉だけど、その時のおれにはジーンと染みてきたんだ。

- 純一 先生、彼女のこと思い出したんだろ。
- 馬場先生 ああ。「もうあなたを愛せない」と言われて女に捨てられたこのおれには、「わたしはあなたを愛している」と言ってくれるだれかの存在が、すぐには信じられなかったんだけど、なぜか心に引っかかったんだ。それからしばらくして、そいつに誘われるまま、初めて教会に足を運んだっていうわけさ。人間の愛に絶望したおれにとって、命を捨てて愛してくれたイエス・キリストこそ、本物の神、救い主だと信じるのに、それほど時間はかからなかったよ。
- 純一 ふーん。先生にもそんな深刻な悩みがあったんだ。
- 馬場先生 そうさ。気楽に生きてるようでも、だれだって心の中には大きな悩みを抱えているもんさ。大人は大人なりに、中学生は中学生なりに。
- 純一 先生に、おれの悩み、分かるかよ。勉強はできないし、ちょっと目立つことすると、「あの子は父親がいないから」とか「過程に問題がある」とか言われるしよ。まあ、先生と違って、女にフラれたことはないけどね。
- 馬場先生 何だお前、自身たっぷりだな。フラれようにも、ガールフレンドがいないなんてんじゃないだろうな。
- 純一 ふざけろよ、先生。あのさ、C組の橋谷りえ子って子、知らない？
- 馬場先生 橋谷？ ああ、あのテニス部のか。彼女がお前のガールフレンドか？
- 純一 まあね。だけど先生、だれにも内緒だからな。うちの学校、一応、付き合うとか、そういうの禁止だろ？ それに、彼女の親、結構厳しいんだ。
- 馬場先生 内緒ってお前、担任のおれに言っというて、そりゃないだろう。
- 純一 先生は別だよ。ほかの先生となんか違うからな。おれのことも差別しないしよ。ましてクリスチャンなら絶対秘密守るだろ？
- ナレーション ところが、それから数日たったある日のこと—。
- (効果音) (校内放送のチャイム)
- 教師A 2年A組の桜井純一、2年A組の桜井純一、至急校長室まで来なさい。
- クラスメート男子 おい純一、呼んでるぜ。
- 純一 何だ？ おれ、何もやってねえよ。
- 男子 でも校長室だぞ。こりゃマズいんじゃない？
- (効果音) (校長室のドアを開ける音)
- 教師A 桜井、なぜ呼ばれたか分かるな？
- 純一 分かりません。
- 教師A こちらは、C組の橋谷りえ子さんのお母さんだ。それでも分らんのか？

よと思って、あれ以来、君はわたしを避けるようにして無視しているので、(途中から馬場先生の声で)手紙で自分の気持ちを伝えることにします。多分君は、わたしが約束を破って、君の個人的な話題を学校で公にしてしまったと誤解しているでしょう。確かに、先日の校長室での出来事から見れば、そう思うのも無理ありません。しかし、これだけは信じてもらいたい。わたしは相手がだれであろうと、変わらず誠実でありたいと思っている。生徒一人一人の中に、キラリと光るものを見つけ出し、それを大切にはぐんでいく、そんな姿勢だけは持ち続けていきたい。なぜならあの時、生きる望みを失っていた自分自身が、神様に「価値」を見いだしていただき、「お前は高価で貴い」と語りかけられた、あの安心感と喜びが忘れられないからだ。そしてそれを君たちと分かち合いたいと思っているからだ。今回のことがどうして橋谷のお母さんに知れたか、大体の見当はついているが、言い訳めくから今は何も言わない。神様はすべてをご存じだから、やがて分かる時が来るだろう。だが桜井、決して投げやりになるな！自分を落ちこぼれなんて思うな。おれを信じてぶつかってきてほしい。おれは待ってる。馬場」。

ナレーション 手紙を読みながら、純一は、以前、馬場先生のアパートを訪ねた時のことを思い出していた。少し照れながら、クリスチャンとなるきっかけになった失恋の話をしてくれた先生の中に、彼は、生徒というより一人の人間として、ありのままに受け入れてくれる人が、ここにいると思ったのだった。

純一 チクショウ。教師のくせに、おれに弱みを見せやがって。あんな姿見せられたら、信じないわけにいかねえじゃねえか。信じたいよ、先生。だけど、だけど…。

ナレーション そうつぶやきながら、純一は先生の手紙を握り締めた。橋谷りえ子が目を泣きはらして純一の家に来たのは、それから数日後だった。机の中に大切にしまっていた彼からの手紙がなくなっているのを知って、問いただした母から、母が偶然彼女の机から見つけ出して、純一との仲を知ったということを聞き出したのだ。その時、純一の心の中には、彼女の母への怒りよりも、何とも言えないうれしさが込み上げてきた。

純一 先生、やっぱウソじゃなかったね。…ごめんよ、先生。

ナレーション その時、純一は、「今度はりえ子を連れて先生に相談に行こう」と、心に決めていたのだった。

(完)